“美濃”刻印須恵器からみた大毛池田遺跡

―――― その１ ――――

小川芳範

Ⅰ．はじめに

平成５年度より、当センターによって始まった愛知県一宮市に所在する大毛池田遺跡の発掘調査の結果、出土遺物を観ると多数の美濃須衛窯産の須恵器が含まれていることに気づく。

特に、本年度の調査では２条のほぼ平行する溝[(1)]からそれぞれ“美濃”刻印須恵器が出土した。これにより、大毛池田遺跡の古代（特に奈良時代における性格づけが、より一層重要になってくると考える。そこで、“美濃”刻印須恵器に関する先学諸氏の研究成果をまとめ、その方向性を探ってみようと思う。

Ⅱ．先学諸氏の研究成果

刻印須恵器研究は、昭和42年に発表された岩野見司氏の成果が、現在この分野での基盤になっている。また、昭和56年には、刻印須恵器生産窯である老洞古窯の発掘調査報告がされた。その中には、高木洋氏の刻印須恵器の分析研究、楢崎彰一氏の刻印須恵器の時期・意味などの総合的研究、野村忠夫氏の文献的考察による刻印須恵器の時期と歴史背景の研究が発表された。以下、簡潔にまとめてみた。

１．岩野見司氏の研究

・刻印須恵器の紹介として、大正時代の林魁一氏、昭和12年の『天平地宝』（東京帝室博物館編）をあげている。
・出土遺物と遺跡の紹介
・刻印文字の分類・区分など
・刻印須恵器の編年について

考古学的考察から８世紀前半に位置づけられるとし、文献上からの考察も“美濃”の使用例を指摘し[(2)]、710年頃“美濃”の文字が使用され始めたとしている。

・刻印須恵器の性格について

官窯生産品として中央へ送られたものと美濃国司管轄下の機関・寺院への供給したものの両面の性格が考えられる。余剰生産品が生産地付近に流通したものと考えられる。また、木曽川南岸の尾張北部に分布する点を村国氏一族の管領範囲内とする指摘をしている。

「「美濃国」施印須恵器について」『考古学雑誌52巻３号』（昭和42年）より。

２．高木洋氏の研究

・刻印須恵器の生産について

老洞古窯跡群中で１号窯のみ生産、総数1290点出土。

・刻印文字の分類について

凸印つまり陰刻文字をＡ類、凹印つまり陽刻文字をＢ類、筆書文字をＣ類とする。

刻印“美濃”をⅠ類、“美濃国”をⅡ類とする。さらに形式細分化して、Ａ－Ⅰ類13種（14形式細分）、Ａ－Ⅱ類７種、Ｂ－Ⅰ類１種、Ｂ－Ⅱ類７種、Ｃ－Ⅰ類17点、Ｃ－Ⅱ類10点としている。

・施印部位について

瓦・高杯を除き、代表的器形のほとんどに施印。15器形、細分25器種に及ぶ。

最多生産品の無台杯身が540点、杯蓋376点出土、杯類合計1142点で全体の９割近くを占めている。

施印箇所には統一的なものはない。印の向きも一定ではないが、無台杯身は99％まで内底に

刻印。

・他地域出土の刻印須恵器について

刻印形式は、A－I－1、A－II－1が多い。老洞古窯の南に存在する朝倉古窯での生産が認められるが、独自の形式のものはA－II類のみ。（生産窯として、各務原市太田古窯が他に存在することが知られている。平成7年度報告書刊行ときく、新たな形式等の発表があるかもしれない。）

刻印須恵器出土地が、当時新たに17ヵ所を加え掲載されている。

『老洞古窯跡群発掘調査報告書』第V章美濃刻印須恵器（岐阜市教育委員会、昭和56年）より。

3．楢崎彰一氏の研究

・老洞古窯の刻印須恵器出土数について

老洞1号窯総出土数の6.7%を占める。

・刻印須恵器の生産期間について

老洞1号窯操業全期間にわたって生産しており、時代が下るにつれ器種が増加。

・刻印須恵器の上限について

708（和銅元）年頃とし、8世紀第1四半期がその生産年代。

・国名入り刻印須恵器生産の意味

官窯的性格の有力根拠、在地における官営工房的性格。

・刻印須恵器出土地について

愛知県出土地（江南市、一宮市、尾西市、葉栗郡という尾張北西部）は、672年壬申の乱で活躍した村国男依の本貫地である美濃国各務郡村国郷の対岸で、一族の管領地域と考えられる。

生産窯の老洞1号窯を含む古窯跡分布の中心は、現在の各務原市の中西部から岐阜市東端であり、当時この地域を領有していたのは渡来人系の各務勝氏と同族とみられる勝氏である。彼らも壬申の乱において村国男依の呼びかけに応じて、活躍したと考えられ、8世紀初頭に郡少領としての地歩を獲得したとみられている。

刻印須恵器出土地の中で、国家規制の働いていたものと考えられるものに、三重県多気郡明和町斎宮跡があげられる。延喜式によると、斎宮寮の財政負担した各国々の調貢品目のうち、美濃国は絹・筆などとともに陶器を出しており、特に陶器は美濃のみである。この関係は奈良時代から成立していたと考えられる。

・美濃国守笠朝臣麻呂と刻印須恵器生産

笠朝臣麻呂の治績として、713（和銅6）年吉蘇路開通、717（霊亀3）年美濃国醴泉行幸の演出、719（養老3）年尾張・参河・信濃三国の管領、720（同4）年右大弁に遷任、721（同5）年元明太上天皇の病により出家、723（同7）年筑紫へ造観世音寺別当として派遣などがあげられる。

彼が、美濃国守から中央政界へ復帰後に刻印須恵器生産が停止されている。生産量が多いのにもかかわらず産地周辺を除くと、出土地が政治色の濃い地点から出土している。想像として、15年の長きに渡る美濃国守を務め、豪腕を振るったといわれる彼が時々における記念事業に際して使用したとも考えられる。

『老洞古窯跡群発掘調査報告書』第IX章結語（岐阜市教育委員会、昭和56年）、『東海考古の旅』（楢崎彰一著、毎日新聞社、平成元年）より。

4．野村忠夫氏の研究

・笠朝臣麻呂の治績について

①“三野”→“美濃”へ国名表記の改定、定着の推進

②“美濃”刻印須恵器の国衙窯経営

③美濃不破関の整備

④席田郡・池田郡の分割、建置

⑤美濃平野部の広域条里の設定

⑥吉蘇路（岐蘇山道）工事の完成

⑦当耆郡醴泉への元正女帝行幸の演出

⑧美濃・尾張・参河・信濃４ヵ国ブロックの按察使就任

上記のように笠朝臣麻呂は、律令国家の完成期に関国美濃の体制を、農民労働力の徴発と組織的な駆使により整えた。また、これは中央政府の方針を受けとめた強力・忠実な施行といえる。そして、老洞古窯群において“美濃”刻印須恵器が焼成された時期は、まさに彼の美濃国守在任中と一致する。

『古代の美濃』（野村忠夫著、教育社、昭和55年）、『古代貴族と地方豪族』（野村忠夫著、吉川弘文館、平成元年）、『岐阜県史　通史古代編』（昭和46年）、『老洞古窯跡群発掘調査報告書』第Ⅷ章文献的考察　老洞古窯跡群の歴史的背景（岐阜市教育委員会、昭和56年）より。

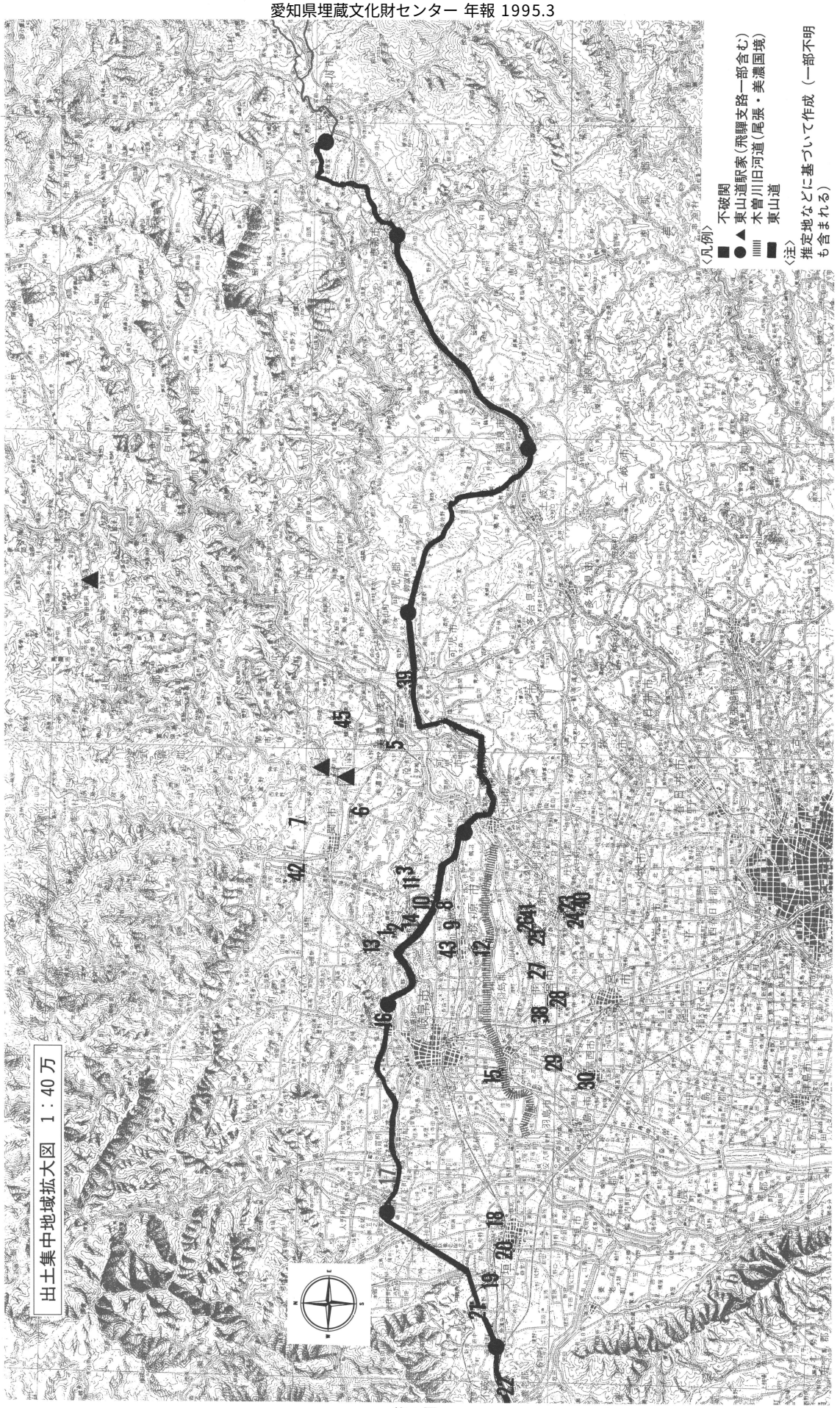
Ⅲ.“美濃”刻印須恵器出土地（第１・２図参照）

１岐阜市　芥見老洞１号古窯跡
２岐阜市芥見　朝倉古窯跡
３各務原市須衛町　太田古窯跡（平成７年度報告書刊行予定、同市埋蔵文化財調査センター）
４長野県飯田市座光寺　恒川遺跡
５美濃加茂市太田町西町
６関市東田原
７関市下有知　榿之木洞遺跡
８各務原市蘇原ノギ山（川崎山）
９各務原市蘇原村雨町　村雨町遺跡
10各務原市蘇原飛鳥町
11各務原市須衛町
12各務原市三井町寺浦　三井遺跡
13岐阜市芥見字長山　長山遺跡
14岐阜市岩滝古宮
15岐阜市茜部境川
16岐阜市長良真生町　城之内遺跡
17本巣郡真正町真桑
18大垣市林町
19大垣市荒尾
20大垣市南一色町若林紡績内
21大垣市青野町美濃国分寺跡
22不破郡関ヶ原町野上字天楽
23江南市尾崎字桐野　桐野遺跡
24江南市赤童子字東山
25江南市後飛保字新開
26江南市宮田字貝売
27一宮市浅井町尾関字奥屋敷　奥屋敷遺跡
28一宮市高田字前田　前田遺跡
29葉栗郡木曽川町玉ノ井先木曽川中洲
30尾西市起字堤町先木曽川中洲
31三重県多気郡明和町　斎宮跡遺跡他
32三重県鳥羽市安楽島町　贄遺跡
33奈良県奈良市佐紀町　平城宮跡
34奈良県橿原市　藤原宮跡
35大阪府守口市金田二丁目　大庭北遺跡
36長野県松本市島立字宮原・西原　南栗遺跡
37長野県松本市芳川平田　平田本郷遺跡
38一宮市大字大毛字池田　大毛池田遺跡（平成７年度まで調査予定、同８年度報告書刊行予定）
39可児市川合地区　川合遺跡群宮之脇Ａ地点
40江南市木賀東町新塚（旧長塚）
41江南市村久野字寺前
42関市下有知重竹　重竹遺跡Ｂ地点
43各務原市那加前洞新町　前洞遺跡Ａ地区
44大阪府大東市北新町　北新町遺跡（平成６年度整理作業中）
45美濃加茂市蜂屋町上蜂屋　尾崎遺跡
46奈良県月ヶ瀬村茶畑　尾山代遺跡

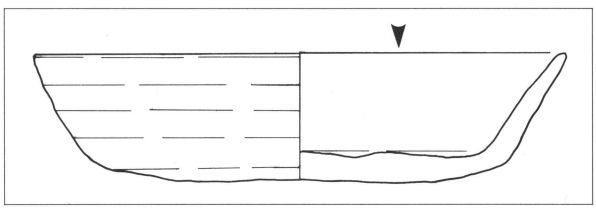
『発掘された東海の古代』（名古屋市博物館特別展図録、平成６年）を追加・訂正した。

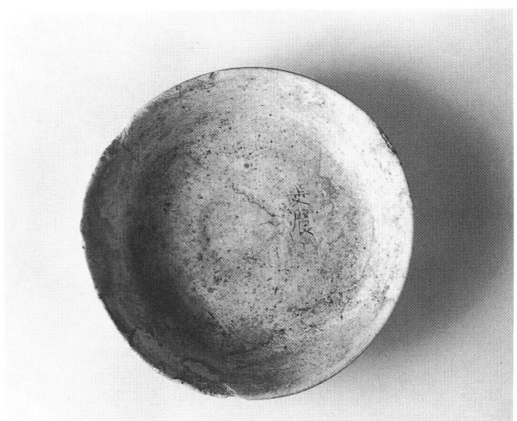
“美濃”刻印須恵器出土分布　1：200万

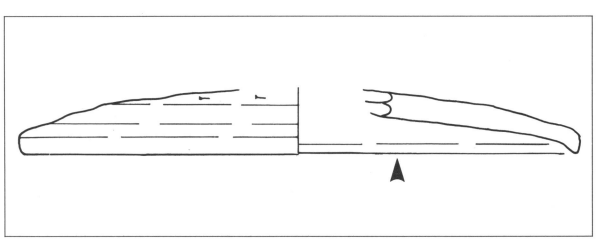
第Ⅰ図

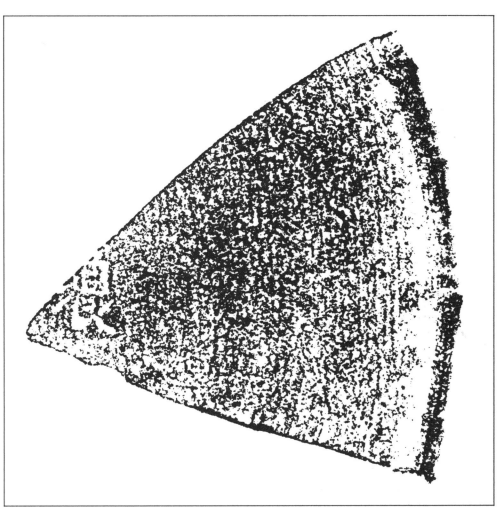

出土集中地域拡大図　1：40万
〈凡例〉
不破関
東山道駅家（飛騨支路一部含む）
木曽川旧河道（尾張・美濃国境）
東山道
〈注〉
推定地などに基づいて作成（一部不明も含まれる）

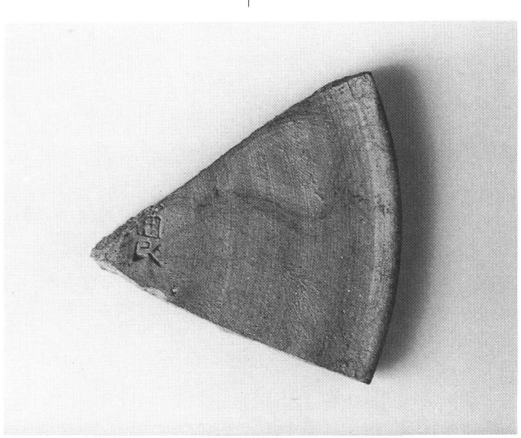
第 2 図











実測図　1：2
拓　本　1：1

第3図

参考文献

『老洞古窯跡群発掘調査報告書』(岐阜市教育委員会、昭和56年) … 1，10，11，17，24，25，26，29，33等

『岐阜市史　史料編考古・文化財』(昭和54年) … 2，14，18等

『恒川遺跡　田中・倉垣外地籍』(飯田市教育委員会、昭和63年)

『美濃加茂市史　通史編』(昭和55年) … 5

岩野見司氏前掲書論文… 6，13，21，22等

『関市史』(平成７年) … 7

『各務原市史　考古・民俗編』(昭和58年) … 9，12等

『三井遺跡』(岐阜県教育委員会、昭和56年) …12

『城之内遺跡』(岐阜市教育委員会、平成２年) …16

『江南市史　資料四文化編』(昭和58年) …23，40

『一宮市史　資料編四』(昭和49年) …27，28

『尾西市木曽川水没遺跡調査報告』(尾西市教育委員会、昭和48年) …30

『斎宮跡発掘資料選』(斎宮歴史博物館、平成元年) …31

『鳥羽贄遺跡』(鳥羽市教育委員会、昭和53年) …32

『飛鳥・藤原宮発掘調査概報16』(奈良国立文化財研究所) …34

『大庭北遺跡発掘調査概要Ⅱ』(大阪府教育委員会、昭和61年) …35

『南栗遺跡』(長野県埋蔵文化財センター、平成２年) …36

『平田本郷遺跡』(松本市教育委員会、平成６年) …37

『川合遺跡群』(可児市教育委員会、平成６年) …39

『重竹遺跡　その３』(関市教育委員会、昭和59年) …42

『前洞Ａ地区発掘調査報告書』(各務原市埋蔵文化財調査センター、平成６年) …43

『尾崎遺跡』(岐阜県文化財保護センター、平成５年) …45

『平城京発掘調査報告書Ⅵ』他 (奈良国立文化財研究所、昭和49年) …33

Ⅳ．大毛池田遺跡と“美濃”刻印須恵器

大毛池田遺跡は、一宮市北西部と葉栗郡木曽川町の接する辺りに所在し、木曽川によって形成された標高９ｍ前後の自然堤防上に広がりが認められる遺跡である。当センターによって平成５年度から発掘調査が進められ、これまでに古墳時代から戦国時代にいたる複合遺跡と確認されている。

特に、本年度の調査では“美濃”刻印須恵器が２点出土し、古代の大毛池田遺跡の位置づけが注目されることとなった。また、戦国時代の方一町に及ぶ区画溝が検出され、国人領主級の屋敷地及び、その家臣の屋敷地の存在が確認された。

刻印須恵器は、幅５～６ｍのほぼ平行して延びる２条の溝の下層から、奈良時代の須恵器の杯・杯蓋・椀、土師器甕など完形品が多く出土した中から見つかった。１点は完形の無台杯で、溝最下層からふせた状態で出土し、内面中央寄りに“美濃”と陰刻されている。刻印形式は、『老洞古窯跡群発掘調査報告書』の分類によればＡ－Ⅰ－11である。もう１点は、杯蓋片が溝下層から出土し、天井部を欠き裏面中央寄りに“濃”の１字が陰刻されているのが認められる。刻印形式は、Ａ－Ⅰ－１と思われる。(第３図参照)

ここでは、古代の大毛池田遺跡の様相を“美濃”刻印須恵器を手がかりに推察しようと思う。大毛池田遺跡は、古代葉栗郡の大毛郷の範囲内に存在したものと考えられる。『和名抄』によれば、葉栗郡には葉栗郷・河沼郷・若栗郷・村国郷・大毛郷の５郷がみられる。また、奈良時代の『貢進仕丁歴名帳』には大沼郷の名がみられる。『一宮市史』などによれば葉栗郷は、葉栗郡の郡家のおかれた主郷と想定されており、現在の一宮市浅井町尾関の地が有力候補といわれる。尾関の地は、浅井北古墳群の存在する歴史背景の強い土地柄であり、また７世紀後半とされる黒岩廃寺が存在する。黒岩廃寺が当時の郡司クラス（冠位小乙中）の豪族とされる葉栗臣人麿が建立したといわれることからも、尾関の地が当郡の中心であったとされている。

河沼郷は、現在の岐阜県羽島郡川島町から愛知県江南市後飛保河野、同市宮田河沼等の地域とされている。若栗郷は、現在の一宮市浅井町大日比野や同市島村等の地域とされている。大沼郷は、現在の一宮市浅井町大野を中心とする地域とされている。

村国郷は、現在の江南市村久野を中心とする地域とされ、村久野は村国の転訛とされている。木曽川をはさんだ美濃国各務郡には村国郷があり、壬申の乱で活躍した村国男依一族はここを本貫地としていた。彼は、乱後まもなく一族で連姓を賜り、村国連男依としている。

彼の活躍を簡単にまとめてみる。大海人皇子側近の舎人として吉野宮滝の地への退隠にも皇子と同行し、乱の勃発にあたって672年６月22日皇子の密命を受けて、湯沐邑の責任者である多臣品治と連絡、周辺農民を動員し不破関をおさえた。伊勢国の中途まで進んだ大海人皇子にその成功を伝えたのが彼であった。７月２日、近江方へ攻撃を開始したとき尾依は大津宮攻撃軍の将軍筆頭に任ぜられた。またその死に際して、大臣位である小紫位に、地方豪族出身を示す“外”の字をつけて外小紫位が贈られた。その他、彼への功封は120戸であったとされ、壬申の乱功臣たちの中の筆頭であった。この功績により一族は、中央下級貴族として定着できたのである。美濃国各務郡にある村国神社二座と村国真墨田神社は、村国氏一族の氏神とされる。尾張の村国郷も一族の管領した地域と考えられ、男依建立といわれる音楽寺、また村国神社が存在する。この村国郷は、美濃国と密接な関わりが深く、また男依の功績から言うまでもなく村国一族管領の地域は一目置かれた存在だったと想像される。そして、この地域周辺が尾張国の中で、特に“美濃”刻印須恵器の出土数が多いのと関わりあると考える。前述した出土地の25，26，41が村国郷内及び周辺である。検討しなければならないが、範囲を広げると出土数は増す。残念なことに、この地域の刻印須恵器の出土が、本格的な発掘調査からではなく畑の土取り等から出土のため、遺跡・遺構から刻印須恵器の背景を考えることが難しい。ただ少なくとも、この地域は刻印須恵器の大量消費地には違いない。今後の発掘調査の成果に、期待するところが大きいと思う。

最後に、大毛郷は現在の一宮市大字大毛を中心とする地域とされている。葉栗郡には天皇に関わる伝説が沢山あるが、大毛の地にもいくつかの伝説がある。『葉栗史誌』によると、「盧入塚は、景行天皇の皇女、五百木入姫（盧入姫）墓地と伝える。五百木入姫は島村の宇夫須那神社の地で誕生され、幼時は栄泉寺で過され、都へ行って成人さる。老後は故郷の栄泉寺で生活されたと当時の栄泉寺の古記録にあるという。一説によれば、大字大毛にある大毛神社の祭神にはこの五百木入姫を合祀するとある。塚の上には五百木入姫を祀る小社がある。」また、大毛地内に天子塚が２つあったといわれており、「景行天皇が妻の八坂入姫命の出産の際、御見舞に来られた時の行宮の跡といひ、二つの場所（塚）がそれだという。」さらにもう１つ、景行天皇墓について、「天子塚の西約200米の地にあった。天保の村絵図にも記載されている。」とある。天子塚・景行天皇天皇墓は、昭和30年代の土地改良事業までは現存していた。往事この周辺は、何らかの形で皇室と関係が深かったと考えられる。また、大毛池田遺跡の所在する地域と天子塚・景行天皇墓の存在した地域はほぼ一致する。“美濃”刻印須恵器をはじめ特異な出土遺物の多い古代大毛池田の地は、過去にその字名が福所や懐とよばれたことから考えても、古代大毛郷の中の一空間を築いていたと考えられないだろうか。

ところで、古代葉栗郡にはどんな氏族が活躍していただろうか、文献上登場してくるものをあげてみる。まず、『尾張国風土記』逸文に「葉栗臣」がある。これは、前述した葉栗臣人麿一族であり、和爾部臣より分派したともいわれる。次に、『尾張国正税帳』天平６（734）年12月に「葉栗郡司少領外従八位勲十二等和爾部若麻呂」と「主帳外少初位上勲十二等伊福部大麻呂」とあり「和爾部臣」と「伊福部」の存在がみられる。

大毛池田遺跡約400mほど南、現在葉栗郡木曽川町大字門間地区に伊富利部神社がある。伊富利部は盧入部であり、前述の盧入姫に由縁があり様々な説や考察とともに伊布利部やがて伊福部に混同したとされる。伊富利部の読み方については、『一宮市史』や『木曽川町史』ではそろって“イホキベ”或いは“イブキベ”と読むべきとしている。この伊富利部神社は、八幡社と伊富利部社の合祀であるが、伊富利部神社の祭神は若都保命である。これは、伊福部氏の遠祖と考えられ、さらに尾張氏の遠祖とされる天火明命につながるとされる。伊富利部神社は、古代葉栗郡氏族の1つ伊福部氏と深い関わりがあるといえ、また当時の大毛池田遺跡も伊福部氏の勢力基盤であったといえよう。

以上2つの点から推察して、“美濃”刻印須恵器出土の大毛池田遺跡は、美濃須衛窯産の須恵器消費地の一遺跡であると同時に、大毛の伝説や伊富利部神社と深い関わりがあった伊福部氏の存在から考えて、ある特殊な色彩を持つ遺跡と考える。さらに、出土遺物に円面硯の他、金属器模倣の器形を含む須恵器が多く、平城宮など特殊な遺跡から出土している蹄脚硯と刻印須恵器を出土した同じ葉栗郡の尾関奥屋敷遺跡とも、また違ったかたちの性格であったといえよう。

V．おわりに

刻印須恵器出土遺跡の中で、奈良時代の竪穴住居や掘立柱建物の確認されている一部の遺跡を以下のように分けてみた。

出土状況	遺構内出土		遺構外出土
	住居跡	溝	
出土遺跡	南栗 恒川 平田本郷	大毛池田	尾崎 前洞 重竹 川合 三井 南栗

刻印須恵器出土遺跡の歴史背景は、722(養老6)年の百万町歩の開墾計画、翌年の三世一身の法、743(天平15)年の墾田永年私財法など律令国家が国衙と郡衙を動かして租税収入の基盤づくりを積極的に展開した時期にあたる。それが実際に行われたと考えられる遺跡から、刻印須恵器が多く出土している。

各務原市三井遺跡は、各務七郷の1つ三井郷の一部地域にあたるものと考えられている遺跡で、周辺の富加町東山浦遺跡・関市重竹遺跡と同様、8世紀代に住居跡が増加し以後減少する傾向を示している。松本市南栗遺跡では、美濃須衛窯産須恵器の搬入は、7世紀後葉から確認され、最も出土数が多いのは8世紀前葉であり、それ以降は減少している。刻印須恵器の出土した竪穴住居は、この遺跡内では特に大型であり、周辺に掘立柱建物を配置したり、柵によって居住域を形成している。官衙的配置を採用して、律令制下における農民支配の一翼を担っていたと考えられる。松本盆地ではこの8世紀前葉に、東山道のバイパスとして吉蘇路の開通が笠朝臣麻呂により実現し、東山道経営を本格化した時期である。中央と結びついた笠朝臣麻呂の積極的な後押しがあった証と考える。刻印須恵器出土遺跡の多くは、律令体制の完成から衰退を経験したと考えられ、国家的統制の働いていた地域に、他の美濃須衛窯産須恵器とともに消費されたのではないだろうか。

さらに、飯田市恒川遺跡のように伊那郡衙跡といわれ、刻印須恵器のほか蹄脚硯・円面硯・和銅銀銭・玢玻璃椀等が出土している特異な性格をもつ遺跡の存在を忘れてはならない。おおげさな表現をすれば、大毛池田遺跡は出土遺物からは恒川遺跡のような何か特異性を感じる。

その他、美濃加茂市尾崎遺跡出土の刻印須恵器は、刻印箇所が杯蓋のつまみ部分であり前例がないと思う。現在整理中ときく各務原市太田古窯の

報告の中に同種が存在するかもしれない。老洞窯産と太田窯産の刻印須恵器の区別ができれば今後の課題としたい。

最後に本稿を草するに当り、(財) 愛知県埋蔵文化財センター高橋信明氏・赤塚次郎氏・杉浦茂氏・北條真木氏他には、多くの御教示・助言をいただきました。感謝の意を表します。また、岐阜市教育委員会高木洋氏、飯田市教育委員会小林正春氏、松本市立考古博物館小原稔氏、一宮市博物館土本典生氏、大東市立歴史民俗資料館黒田淳氏ほか、関市教育委員会、美濃加茂市教育委員会、江南市歴史民俗資料館、奈良国立文化財研究所、橿原考古学研究所には、資料・情報を御提供いただきました。記して謝辞とします。

注

(1) (財) 愛知県埋蔵文化財センター『平成6年度年報』大毛池田遺跡調査の概要を参照。

(2) 709 (和銅2) 年の弘福寺田畠流記帳、720 (養老4) 年完成日本書紀天武二年の条、750 (天平勝宝2) 年正倉院文書奴婢帳美濃国司解。

参考文献

『一宮市史　本文編上』(昭和52年)
『木曽川町史』(昭和56年)
『愛知県の歴史』(塚本学・新井喜久夫著、山川出版社、昭和56年)
『岐阜県の歴史』(中野効四郎著、山川出版社、昭和45年)
『長野県の歴史』(塚田正朋著、山川出版社、昭和49年)
『図説愛知県の歴史』(林英夫編、河出書房新社、昭和62年)
『図説長野県の歴史』(古川貞雄編、河出書房新社、昭和63年)
『岐阜市史　通史編』(昭和55年)
『長野県史　通史編原始古代』(平成元年)
『式内社調査報告　東海道』(式内社研究会、皇学館大学出版部、平成元年)
『古代日本の交通路II』(藤岡謙二郎編、大明堂、昭和53年)
『東山道の実証的研究』(黒坂周平著、吉川弘文館、平成4年)

追記

新たに“美濃”刻印須恵器出土が確認されたものを本稿IIIに加えたい。

47　不破郡垂井町垂井